

月乙女

シテ 天人

ワキ 下京辺の者

ワキツレ 同

所 京

時 中秋

次第 「秋も半ばの暮待て。く。月に心や急ぐ覧。

ワキ 「是は下京辺のものにて候。我雪月花の色を好み。常にもてあそび候。殊に今夜は八月十五夜。明月にて候程に。若き人々をあつめ。月下に酒を酌。たのしまばやと存候。

歌 「夕風過る月影の。く。早出初て面白や。万里の空も隈なくて。焉くの秋も隔てなき。心も消て夜もすがら。三五夜中新月の色。二千里の外の故人

の心。

シテ、一声 「荒面白の折からやな。明ば又。秋の半もすぎぬべし。今宵の月のおしきのみかは。

ワキ 「不思議やみれば類ひなき。姿こと成御有さまにて。玉の簪あたりもかゝやき。月に映じて立寄給ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ 「是は今宵の月のかげに映じて。上界の天女あらはれ出て。仮にまみゆるばかり也。

ワキ「是は奇特の御事なり。さばかりならぬ空の上。

シテ「天津乙女のまれに来て。

ワキ「返すや袖のたをやかに。月の光りを奪ふかと。

同「おもほえず。夢かとばかり見し夜半の。く。月

の桂の。天津人。あらはれ出し君が代は。実浅からぬ時津風。雲ふき払ふ秋の夜の。長き奇特は是ならん。く。

ワキ「寔に妙成御事にて候。是偏に月に乗じ心を移す故

成べし。迎もの事に月宮殿のまひを御撫候へ。

シテ「我仮初に下界に下り。世に例なきまひの曲。顕し

人にま見えんことは叶ひがたし。さりながら。末

世の奇特によもすがら。舞曲をあらはし見せ申さん。

同「迎もま見えし花の袖。く。また顕はれて有明の。

月の都の小忌衣。重て返し申べし。必ず待せたまへやと。云かと見ればうちわたす。もみぢのはし

をのぼりこえ。雲に隠れてうせにけり。く。

ワキ

「嬉しきかなやいざ更ば。く。月も照そふ秋の夜の。空の気色もおりからに。有つる告を待て見ん。く。」

後シテ一声

「君が代は。尽じとぞ思松が枝の。幾十返りの色深く。猶光りそふ天が下。」

同

「実妙なりや乙女の袖。くに。月澄わたる秋の夜の。もみぢも袖も。朱をうばふや。花むらさきの

空のいろ有分野哉。 (破の舞)

同

「既に明行名残の曲。く。とりぐなれや天津乙女。帰る名残をや、吹とぢよ。雲の通ひ路又うきぐもに。あがると見えしが少時は天の。羽袖を返しくて。明行雲間にかくれけり。」